

5

スリム化

方式を整理し、APを伝えやすい入試に

甲南大学

「人物教育の率先」という建学理念の下、
 教学の新機軸を打ち出し、しなやかに推進する甲南大学。
 入試方式の改革とその成果を、学長室課長の林正樹氏に聞いた。

理念を貫き改革するも
 マーケットの壁は厚い

入試改革を行うにあたり忘れてはいけないのは、我々大学は人材の育成が使命であるということ。受験生や高校教員などに大学の特徴をきちんと伝え、学生を受け入れて社会へ送り出すという本分を踏まえたうえで、入試改革を行うべきだと考えています。

2014年度入試の改革では、それまで11あった入試方式をセンター試験利用方式を中心に7つに削減しました。また、名称もアルファベットではなく、わかりやすいものに変更しました（右上図表）。改革の主な目的は、アドミツションポリシー（AP）に合致した学生や志望度の高い学生を増や

すことでした。加えて、多くの受験生が複数方式を併願するため、延べ志願者数が増え、複雑な併願

パターンによって受験者の実態をつかみにくくなったことも理由の一つにありました。
 この改革によって学内併願の状況が把握しやすくなり、高校の先生からは「入試制度がわかりやすくなった」と評価されました。また、学内の入試業務の負荷も軽減できました。

ただ、入試は非常にデリケート



学長室 課長
林正樹

はやしまさき ●1987年、甲南大学法学部法学科卒業。1988年、甲南大学に入職。大学入試事務室配属。甲南大学入試事務室課長。経営企画室に勤務後、2007年、フランス甲南学園トウレツ日本事務所勤務。2015年、大学事務部勤務。2016年4月に学生募集広報業務が学長室に編入し、同室課長に就任。教育の質保証と高大接続を学長直轄で推進する。

なものです。理念に基づく教育の実践と志願者増を両立させることは簡単ではありません。2014年度入試のセンター方式を除く一般入試の延べ志願者数は、前年よりも微減となりました（左下図表）。入試方式の削減により、受験機会が減ったことが原因ではないかと考えています。こちらが思うようにはいまうまいかない、マーケットに理解してもらおうのは難しいと感じました。

とはいえ、入試方式の一本化や派手な入試方式への変更を行うつもりはありません。バランスのよい学力を持った学生とさまざまな個性を持った学生を、適切なバランスで受け入れていきます。入試はあくまでも教育の一環ですから、派手さは追い求めません。

入試を通して
 自学の姿を伝える

今の大学選びの実状をすぐに変えることは簡単ではないと思いがちですが、まずは我々がどういった大

11種類の方式を7種類に

～入試方式の推移

2013年度入試	2014年度入試
E日程	→ 一般前期
A日程	→ 一般前期2教科判定
E日程O方式	→ 一般後期
B日程	→ センター併用型前期
E日程C方式	→ センター併用型後期
A日程C方式	→ センター利用型前期
S日程	→ センター利用型後期
B日程C方式	→ センター併用型前期
C日程前期	→ センター併用型後期
C日程中期	→ センター併用型前期
C日程後期	→ センター併用型後期

ツールとして高校教員向けに特化した「データブック」の作成を検討しています。

こうしたツールをきっかけに、自学の姿勢を丁寧に伝える。めざす人物像があり、それを表現する教育があり、この教育を受けるにふさわしい人物かどうかを確かめるための入試がある。これらを伝えることが、我々の役目です。

2019年に学園創立100周年を迎えます。これに向けて、融合型グローバル教育など、教学の「新機軸」を策定、実行中です。その一つとして、2016年度から授業クラスを最適なサイズにする取り組みを開始しました。1年次の科目はごく一部の例外を除き、最も受講者数が多い授業でも150名以下となっています。ま

た、全学共通教育において、学部混成ゼミを編成しています。これらは、メディアムサイズの総合大学だからこそ実現できる施策です。こうした教育の特徴をしっかりと理解して、本学で学びたいと強く希望する受験生に入学してもらうことが理想です。

いずれは、IR情報を活用し、授業定員数と学生の満足度との相関など、説得力のある情報を発信したいと考えています。

学部方針を具現化した
 AO入試・公募推薦

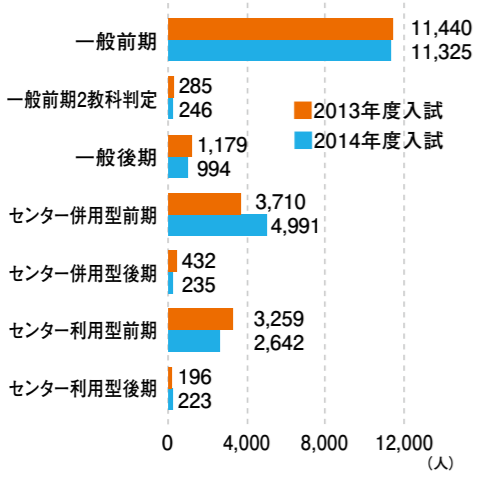
8年前に開設したマネジメメント創造学部は、ユニークなAO入試及び丁寧な公募制推薦入試を行っています。どちらの入試も他大学

学であるかを伝えないと、受験生は選びようがない。もちろん、どの学部にもどんな専門家がいて、どのような教育が行われているか、という教育の中心に関心を持ってもらうことが一番ですが、これを伝えるのは難しい。受験生、保護者、高校教員らステークホルダーが求める情報をわかりやすく提供できるように準備を進めています。

誰に伝えるべきか、発信先も大切。受験生向けの情報サイト「甲南Ch.」はその一環ですが、今後、本学は特に、受験生の指導者である高校教員を重視していきます。同じ教育者の視点で本学を見て、真の姿を理解してもらいたいからです。大学案内では知りたい内容をつかめないと聞かれますから、新しいコミュニケーション

方式削減で一般入試志願者数は微減

～入試方式別志願者数の推移



に比べて多くの提出物を求める書類審査、そしてAO入試の一部にグループワークを課す点、公募制推薦入試に学力審査だけでなく面接審査も行う点などが特徴です。ボイルズ・コリン学部長は、こう述べています。「本学部は出

席が厳しく課題も多いので、受け身な気持ちで入学してくるとミスが起きます。グループワークは人と議論しなければならぬので、前向きな考えの持ち主かどうかを判断できます。このような入試の特徴は、セルフセレクション（自己選択）を促すことにもなり、志望意欲の低い受験生は合格までたどり着けません。つまり、入試を通じて、受験生に学部の方針を理解してもらっているわけです。

この入試による過去の入学者を見ると、APに合致した人物が集まっています。受験生にとってはとても労力がかかるため、本当にやる気のある受験生が集まるのです。2016年度入試から、計7学部に同様の公募制推薦を導入しました。またマネジメメント創造学部では、合格発表から入学までのモチベーションを保つため、合格者にスクーリングを課し始めました。こうした一連の取り組みは、高校教員の皆さんからも評価されています。

学びに対する期待の大きさは、入学後の学習姿勢に直結します。この期待を高めることこそ、人をつないで育成する「高大接続」に不可欠な視点だと我々は考えています。

*この取り組みの詳細は「Between情報サイト」で6月下旬に紹介する予定です。
<http://between.shinken-ad.co.jp/hu/2016/06/databook.html>



How to...